

小坂奇石書芸の一考察

－ 驥山館収蔵作に関する考察－その1

A Study of Kiseki KOSAKA's Calligraphic Products

－ A Study of Safekeeping Calligraphic Products in Kizankan (Part 1)－

東 國 恵(南光)

Kunimegu AZUMA

(Nanko)

目 次

はじめに

1. 小坂奇石の誕生
2. 黒木拝石に師事、小坂奇石の少・青年時代
3. 漢詩の学習と自作の漢詩作品
4. 驥山館収蔵奇石作品一覧表
5. 年代別作品の題材と書作品の特徴について
 - A. 20歳代の書（1点）
 - B. 40歳代の書（2点）
 - C. 50歳代の書（5点）
 - D. 60歳代の書（6点）
 - E. 70歳代の書（11点）
 - F. 80歳代の書（25点）
6. 驥山館収蔵の奇石書芸
 - ①書体及び形式等の種別
 - ②仕上げ体裁
 - ③書風による流れ
7. まとめ
 - おわりに
 - 写真資料
 - 参考文献

はじめに

徳島が生んだ小坂奇石の書芸について、徳島県収蔵の作品の考察を、1997年の第4巻徳島大学総合科学部人間社会文化研究紀要紹介済みである。この度、長野県篠ノ井市布施高田380「驥山館」収蔵の小坂奇石作品50点について考察を行う。奇石は十六歳で黒木拝石に師事し、書聖王羲之を中心に顔真卿などの伝統書法を基盤として、六朝北魏の楷書の雄大さと力強さを学び、終生「線の行者を自称して鍊度を深め気韻生動を旨としながら、禅僧の高い精神性と書法を学びながら、技法を超越して格調の高い作品を次々と発表。その成果が世に認められ、日本芸術院恩賜賞・芸術院賞を受賞となった。また中国内でも絶大な評価を受けており、多くのファンも増している。奇石と川村驥山翁との親交は昭和初期からで、ご両人が書家として漢詩人として、戦後の書道界で「詩書一如」を具現した数少ない同志だった。驥山没後も小坂家との親交が続いていることもあり、近時奇石作品50点が奇石の長女小坂淳子女史から寄贈された。更に奇石の弟子の山本雨杏からも6点最近寄贈された。今回は前者の50点について、驥山館作成の一覧表を参考にまた、作品集を鑑賞しながら、奇石書芸について、年代順更に項目別で分析しながら探してみたい。

1. 小坂奇石の誕生

1901年（明治34年）辛丑の1月13日に徳島県海部郡三岐田町（現在の由岐町）小坂芳蔵・カツの長男として（本名光太郎（みつたろう））誕生。奇石の生家は雑貨商を営んでいた。後には、塩と煙草を当時は、酒、調味料、呉服、傘、縄などいろいろ。藍の壺も沢山あり染物もしていた。奇石は、商売は一切せず、二階から降りてくると、店の煙草（朝日）をひょいと袂に入れて出ていく。家の前を道路が横切って20mほどで海辺の砂浜という漁村に生まれ育った。

2. 黒木拝石に師事、小坂奇石の少・青年時代

12歳由岐尋常高等小学校入学。13歳のとき由岐町延命寺の住職阿部捉龍に書の手解を受ける。翌年14歳で同校二年卒。日和佐尋常高等小学校高等科三年に編入。翌15歳で同科卒業。1917年（大正元年）16歳で黒木拝石に師事。18歳で明石市役所（庶務）に勤務（1922年病氣依願退職（21歳）まで）。20歳（1921年）で関西大学専門部入学したものの（1923年病氣中途退学）。21歳（1922年）で日本電気（秘書・人事）に勤務（1924年病氣依願退職）。22歳で休職扱いで帰郷して病氣療養。その間、徳島三岐田町に臨済書会をつくり主宰となり、師の黒木拝石がはじめて徳島の海部で書道講習会を開催。24歳（1925年）のとき三岐田町志和岐の小学校代用教員となる。昭和元年25歳で「書道三昧」を発刊。黒木拝石が二回目の海部書道講習会をひらく。1927年26歳のとき、黒木拝石が「書学」発刊のため「書道三昧」は廃刊。1928年昭和3年27歳で堀カツミと結婚。その年東大阪に新居をかまえ、阪和電鉄（秘書・人事）勤務。（1939年昭和14年38歳大阪ガス庶務人事に勤務までの間）翌1929年昭和4年28歳のとき、長女淳子氏誕生。翌1930年昭和5年29歳のとき大阪市東住吉区田辺東一丁目8へ転居。更

に翌年東住吉区山坂町4040へ転居。1935年昭和10年34歳で山坂町2－81。南田居と称してたところに住む。1978年昭和53年77歳のとき今の奈良市学園大和町2－89に転居までの間、43年間在住。結局、黒木拝石の書道指導により、就職も、書道を生かした庶務・人事・秘書等の勤務が主であった。

3. 漢詩の学習と自作の漢詩作品

1929年昭和4年28歳から漢詩を漢学者の梅見有香に師事し、1935年まで学んだ。後1939年に大阪ガス（庶務人事）に勤務した年から漢学者土田江南に師事し、1942年まで学んだが1942年から増田半剣に師事。1944年まで学ぶ。2年後の1946年45歳で長岡参寥に師事。最後は土屋竹雨に師事。次々と師の遍歴があるが、1993年平成5年出版の「小坂奇石の生涯」にも110首に近い詩抄が掲載されている。その時々的心情を吐露し「詩書一如」の書作品として残っている。明治・大正・昭和と生きた書道家の中では、今回の川村驥山翁とともに貴重な存在であることは見逃せない。

特に1989年平成元年の米寿個展の詩「八十八年如夢遷、臨池磨墨尚依然、而今願處無他事、字々渾身寫白箋」八十八偶成の作では「八十八年夢のように過ぎて、臨いけ磨墨は以前の通りである。これからは願うところは他ではない。渾身の力を白箋にうつすことである。」とその時の心境を作品化。奇石書業を白便箋に濃墨で墨痕鮮やかに表現したのが、今も鮮烈に脳裏に残っている。それに恩賜賞並芸術院賞の受賞の詩「惠風吹滿地天間 芸府森然瑞氣環 無限鴻恩慈若海、布衣八十拜龍顏」書芸を極めた結果として、明治生まれで同年の天皇に拝顔、しかもその手からの受賞の感激、更に1m余りの卓をはさんでの、陛下のまぢかでの賜餐の光栄。その胸の高なりが伝わってくるようである。

今回驥山館収蔵作品50点のうち3点のみが自作詩による作品である。その一つは9の題金農梅花図は、1961年昭和36年60歳還暦の作。「冬心妙筆寫春心 絶憶羅浮仙女簪 把翫多時樂無盡 清香半日在衣襟」は作詩は以前のものであると思われるが、45×65cm虎皮箋に軽快な筆致で書かれ五行の行草体で書き、冬心の梅花図の妙筆と奇石自身の妙筆を比べるかの如き作である。まさに詩書一如そのものである。（写真1） もう一つは、23、南田居雜詩之一で1980年昭和55年79歳の作である。奈良転居が77歳のときなので「永日幽齋独喫茶 敲詩読画思無邪 纔聴軒滴催閑睡 微雨蕭々灑蕙花」（写真2）この詩は南田居は山坂町で作られたものであるが、おそらく、書作品は奈良転居後に南田居を懐かしんで書いたものと考えられる。二曲屏風に全紙を夫々三行ずつ明快潤達な筆致で書き上げた品のある作。三つ目は1989年米寿記念個展の作。（平成元年88歳）「西園慈雨過 春色似相誇 嫩柳千條綫 新蘆三寸芽 婦隨池畔鳥 紅笑社前花 不道風猶冷 陽光照淺沙」詩情とは、やゝ異った線質で筆致が強く春ののどかさ、柔和とは異なった作のように思われる。（写真3）

4. 驥山館收藏小坂奇石作品一覧表

番号	作 品 名	書 き 出 し 文 字	制 作 年	年 齢	備 考	軸	額	その他	寸 法 (cm)
1	陶淵明詩	洋々平津	1925 大14	24		○			140×34
2	陶淵明 桃花源記	晋太元中	1941 昭16	40		○			64×67
3	張問陶詩	錦衣玉常雪中眠	1947 昭22	46		○			130×30
4	陶淵明 五柳先生伝	先生不知何許人也	1953 昭28	52				卷子	33×321
5	七言二句	青松不礙人來往	1954 昭29	53		○			131×33×2
6	高青邱詩	画師知余愛青山	1957 昭32	56				屏風 (六曲)	136×35×6
7	陸湘客語	焚香看書	1958 昭33	57		○ 対幅			157×26×2
8	森春海語	濛々午雨細煙籠	1959 昭34	58			○		130×52
9	自作題金農梅花図	冬心妙筆写春心	1961 昭36	60		○			46×65
10	五言律詩	聽法穿雲過	1961 昭36	60			○		57×136
11	白楽天詩	我愛此山頭	1963 昭38	62				二曲 屏風	68×68×2
12	七言絶句	耳根得所琴初暢	1964 昭39	63			○		135×34
13	一悟寂為樂	一悟寂為樂	1966 昭41	65			○		111×69
14	尺天成句	軀覺国光飄座上	1970 昭45	69	畫 賛	○			44×47
15	貞心尼 良寛歌	秋はぎの	1971 昭46	70			○		43×33
16	寒山詩	有一食(餐)霞子	1972 昭47	71		○			130×31
17	王維詩句	行隨拾栗猿	1972 昭47	71			○		67×100
18	蘭亭集序	永和九年	1973 昭48	72			○		34×203
19	陸湘客語	竹籬茅舍	1976 昭51	75				四曲 屏風	133×35×4
20	姚斯道詩	空林長掩関	1976 昭51	75			○		76×45
21	棲遲慰情	棲遲慰情	1978 昭53	77			○		62×70 c m
22	鸞王喫乳	鸞王喫乳	1980 昭55	79			○		38×146

番号	作 品 名	書 き 出 し 文 字	制 作 年	年 齢	備 考	軸	額	その他	寸 法 (cm)
23	自作・南田居難詩之一	永日幽齋獨喫茶	1980 昭55	79				二曲 屏風	68×67×2
24	楊万里詩	路傍野店面三家	1980 昭55	79				二曲屏風	125×69×2
25	真光不輝	真光不輝(輝)	1980 昭55	79			○		122×33
26	神爽	神爽	1981 昭56	80			○		70×140
27	澹如	澹如	1981 昭56	80			○		49×102
28	四面有山皆入画	四面有山皆入画	1981 昭56	80			○		130×35
29	七言二句	自茲半里瑠璃寺	1983 昭58	82			○		25×16
30	中行无咎	中行(無)咎	1984 昭59	83			○		67×68
31	鶴即垂翅志在九霄	鶴即垂翅志在九霄	1985 昭60	84			○		68×125
32	雲出岫	雲出岫	1986 昭61	85		○			67×42
33	面壁	面壁	1986 昭61	85			○		99×51
34	瓜田不納履	瓜田不納履	1987 昭62	86			○		123×33
35	杜甫飲中八仙歌	知章騎馬似乘船	1988 昭63	87		○		四屏	135×35×4
36	笑而不謔	笑而不謔(答)	1988 昭63	87			○		35×138
37	蘇東坡 廬山三偈之一	溪聲便是広長舌	1988 昭63	87			○		67×130
38	蜂房不容鷓鴣卵	蜂房不容鷓鴣卵	1988 昭63	87			○		62×67
39	鹿鳴	鹿鳴	1988 昭63	87		○			29×62
40	鈍鳥栖蘆	鈍鳥栖蘆	1988 昭63	87			○		35×135
41	読書得趣是神仙	読書得趣是神仙	1988 昭63	87			○		66×66
42	書魂	書魂	1988 昭63	87			○		67×69
43	南山寿	南山寿	1989 平1	88		○			100×41
44	鑑澄潭	鑑澄潭	1989 平1	88			○		35×140

番号	作品名	書き出し文字	制作年	年齢	備考	軸	額	その他	寸法 (cm)
45	山部赤人の歌	若浦鹽満来者	1989 平1	88		○			52×32
46	自作早春	西園慈雨過	1989 平1	88		○			69×72
47	山鳥啼野花笑	山鳥啼野花笑	1989 平1	88		○			125×35
48	飯田蛇笏の句	花辨の肉	1989 平1	88		○			52×32
49	七言二句	今夜莫彈伯牙曲	1989 平1	88			○		69×72
50	五言二句	行到水窮處	1989 平1	88			○		84×29

5. 年代別作品の題材と書作品の特徴について

A. 20歳代の書（1点）

1. 陶淵明詩 1925年頃大正14年24歳頃の作。黒木拝石に指示している時の作で、王羲之風のオーソドックスな作。四言八句を半切三行に行書で纏め渴筆もあり筆力筆致とも優れている。（写真4）

B. 40歳代の書（2点）

2. 陶淵明の「桃花源記」1941年昭和16年40歳の作。全紙 $\frac{1}{2}$ に小字で一行20字程で本文16行落款1行行書の単体で王羲之風の作。（写真5）
3. 張間陶詩の七言絶句を1947年昭和22年46歳の作。半切に三行で大小・細太の変化とたて画の太くて長いのが印象的で、運腕大きく気宇雄大な感じ。筆もよく暢達している。二点しかないが、二点は前者が真面目であらたまった作だが、後者は自由奔放な作で対象的である。（写真6）

C. 50歳代の書（5点）

4. 陶淵明 五柳先生伝 1953年（昭和28年52歳）の作。33×321 cmの卷子で、草書を基調に文字の大小も適当に変化に富みよく暢達した第一段22行で書き、第二段9行を自由濶達にそして第三段は7行でやゝ小さく心情をおさえた単体の作。一度落款印を捺印した後「時癸巳六月十有九日やを追筆して最後の余白を填めているのが印象的である。（写真7）
5. 七言二句（対幅） 1954年（昭和29年53歳）の作。「青松不礙人来往 野水無心自去留」を半切に七字二幅に筆圧が一定の単体の草書で変化に乏しいが、墨色の変化がある。4が変化自在の連綿の妙に対し、無骨さを覚える5の作風で実に対照的である。落款は黙語子光書於南田草堂とある。
6. 高青邱 林屏山水図歌 1957年（昭和32年56歳）の作。半切六幅に各幅2行書きで六曲屏風半双に仕上げた。やゝ筆の鋒先のつんだ羊毛の柔らかい筆で、連綿草書の温かさ、優しさがあり、墨色の変化がありよく暢達している。50歳代の力作であり傑作である。日本を代表する現代書道二十人展出品作で奇石書芸の特徴を遺憾なく発揮した作品と思う。（写真8）
7. 陸湘客 醉古堂剣掃中語 1958年（昭和33年57歳）の50点中唯一の楷書の作。157×26 cmの豆腐毫の対幅で、各幅二行で書き上げた貴重な作。六朝北魏の力強い楷書をベースに豆腐毫の柔らかさが加味された温味のある作。陸湘客之語 奇石光録の行書の落款も印象的である。（写真9）
8. 森春涛詩 1959年（昭和34年58歳）の作。七言絶句を聯落三行に草書体の単体で仕上げた。6の書風に近いが筆力では8の方が勝るが、連綿は落款春涛のところのみ。

この50歳代に奇石書芸の骨格というか筆致と筆勢の基盤が構築された感が強い。特に（写真8、9）が代表的表現といってもよい。

D. 60歳代の書（6点）

9. 自作題金農梅花図 1961年（昭和36年60歳）前項3の自作詩のところで紹介済み（写真1）
50歳代の書に更に変幻自在の運筆の妙が還暦を迎え一段と冴えている。これも奇石書芸の傑作の一つかと思う。前項でも書いた「詩書一如」詩と書が一体化した心情をこの作品から感じられる。
10. 五言律詩 1961年（昭和36年60歳）の日展出品作。全紙を緩やかな扇面で型取った8行横物
肉厚な線質と力感溢れる気迫の作。やや息苦しさを覚える。
11. 白楽天詩 1963年（昭和38年62歳）日展出品作。二局屏風半双。全紙 $\frac{1}{2}$ 二枚に五言律詩を
50歳代の書より楽な筆致でしかも明快に、全紙を横にした状態に行草体9行書き。但し最後の
二行の落款はやゝ小さ目。押捺の後揮毫年月を追筆している。筆の特性である弾力性を生かし、
筆の開閉、表裏を巧みに駆使した変化に富んだ傑作の1つである。（写真10）
12. 七言絶句 1964年（昭和39年63歳）の作。半切たて三行で行間の余白が感じられない程大胆
な草書体で自由奔放に運筆の妙を楽しんだ作。（写真11）
13. 一悟寂為楽 1966年（昭和41年65歳）の作。全紙に五文字。重厚さと筆力の強さがあり見事。
70歳代の書に多く見られる。禅僧の書の影響を受けた迫力の書の前兆を感じさせる書。気宇雄
大、精神の強さを覚える書。これも奇石書芸の代表作といってもよい。（写真12）
14. 尺天成句（画 矢野鐵山） 1970年（昭和45年69歳）墨游展画家の矢野鐵山が蘭を描きその
画賛として奇石が行草体で、一行目4字、二行目3字、三・四行目各2字、五行目3文字、六
行目は、尺天成句の4字、最後に奇石書の3文字を配した書画一如というべき作。

この60歳代の書は、50歳代に構築された奇石書芸により内面的溟利を出すとともに、書道作品における筆力の強さを強調しようとした初期かと思われる。

E. 70歳代の書（11点）

15. 貞心尼の歌、良寛の歌 1971年（昭和46年70歳）古稀個展の作。仮名調の和歌＝首、繊細で
蕭洒な中に歯切れのよい明快な作。墨色も淡く、奇石書芸の品位の高い表現の一つで、70歳代
の一つの特徴かとも思われる。（写真13）のように右側三行に貞心尼の歌を一行あけて、良寛
の歌を最後下段に奇石かくと入れ、紙の裁断も斜めにしたところ心にくいばかりである。仮名
臨書の成果が70歳代の書作品の一代表表現として見応えある作の一つである。
16. 寒山詩 1972年（昭和47年71歳）の作。半切三行行書を基調に行間を取らずに、二行目に大
きい字を配した自在な書。60歳代の12の書の共通性がある。
17. 王維詩句 1972年（昭和47年71歳）日展の作。67×100 cmの横額に各行三字、四行目のみ
一字、その下に王輞川燕子龕詩句奇石書と剛毫筆で行書体の深味と力量溢れる作。（写真14）
18. 蘭亭集序 1973年（昭和48年72歳の作。34×203 cm額装。本文38行落款2行。更にその左
下に奇石光を署名。一行に11～12字の行草体。行間は通っているが、適度の行のうねりの交応
と変化が見る人を楽しませる。）（写真15）
19. 陸湘客 醉古堂劍掃中語 1976年（昭和51年75歳）半切に二行書き4幅の四曲屏風半双。

大胆な筆致。やゝ強引な程筆力と渴筆から少し荒々しさを覚える程である。

20. 姚斯道詩 1976年（昭和51年75歳）の作。76×45 cmの絹にたて4行行書作。自由自在な運筆と潤達な筆致から生まれた絹の柔らかさと渴筆が最高である。70歳の傑作といっても過言でない。（写真16）
 21. 棲遲慰情 1978年（昭和51年77歳）の作。蘊筆で揮毫したため抑揚がなく太さも一定。潤渴の面白さがあり、70歳代奇石書芸の特徴の一つである筆力と迫力と気宇の雄大さ更に一気呵成の作の代表的な作。（写真17）
 22. 驚王喫乳 1980年（昭和55年79歳）の作。38×146 cmの横額に右から54字迫力と気迫のこもった雄姿な作。
 23. 自作 南田居雜詩（二曲屏風）3の項ですでに紹介済み。（写真2）
 24. 楊万里詩（二曲屏風半双） 1980年（昭和55年79歳）の作。全紙二枚に各枚3行書きの作で、70歳奇石書芸のもう一つの特徴ともいいうる。自由奔放の筆致で運腕も大きくやゝ長鋒を駆使し、潤達に筆を弄し正に書を楽しんでるがごとき作品。20の（写真16）と相い通じる作。（写真18）
 25. 真光不燐（輝） 1980年（昭和55年79歳）の作。半切たてに行書で「真光不燐」の四字を神にささげる心境で、墨痕鮮やかに書かれ、その誠意が紙背に徹するような作。21、22の作品と同じく、迫力・気力が横溢し、その上余分なところがなく、簡素で素直な作品である。（写真19）70歳代の奇石書芸の特徴を三つに大別することが出来る。その一つは、60歳代から始まった、小字の多字数を明快に潤達に筆を弄して書を楽しむ流れ。2つは、筆圧をきかせ線も太く大胆且つ雄大に気迫と迫力を求め、精神性を高め作品からの余韻を大切にしようとする作品の流れ。3つは、やや長鋒の筆を駆使し、行間など余り意識しないで、一気呵成に筆の特性である弾力性、表裏性、開閉性を巧みに筆を弄し作品化する流れに分かれると思う。
- F. 80歳代の書（25点）**
26. 神爽 1981年（昭和56年80歳）作。70×140 cm全紙横に二字。70歳代の奇石書芸の大胆で筆圧のきいた気宇雄大な作風と共通する作。気迫の横溢と細部にこだわらない雰囲気と線質からくる温かさと韻がすばらしい。（写真20）
 27. 澹如 1981年（昭和56年80歳）の作。49×102 cm横額二文字。語義に相応しく、淡泊でありとしていて、大きい広がりと動きを覚える作。
 28. 四面有山皆入画 1981年（昭和56年80歳）の作。半切たて一行七字の行書作品。直線を主に余分なところを省いた簡素で明快な作品。
 29. 七言二句 1983年（昭和58年82歳）の作。25×16 cmの詩箋に筆圧をきかせ、字形がすべて丸味のある三行書きのミニ作品。
 30. 中行无（無）咎 1984年（昭和59年83歳）の作。全紙 $\frac{1}{2}$ に四字草書作品。少画で太い線で潤と渴を巧みに使い、単純な線の方法と線の深まりと動きが面白い。易経の「中行无咎」に相応しい作。右下の游印も効果的。（写真21）

31. 鵠即垂翅志九霄 1985年(昭和60年84歳)の作。全紙横額に三行。「翅」の支の右払いの右下りと「在」の一画の右上りの呼応が面白い。やや長過ぎたようだが、よく調和している。
32. 雲出岫 1986年(昭和61年85歳)の作。67×62 cmたて3文字。題材に相応しく、雲が湧き出るが如き墨量と渴筆の変化が見事。
33. 面壁 1986年(昭和61年85歳)の作。99×51 cm剛毫筆か筆が充分墨になじまない筆で書くことをねらったのか、やや荒々しい感じが免れない。しかし、運筆の速さと筆致の鋭さは、面壁九年達磨大師が修行した、その厳しさを彷彿させる作。
34. 瓜田不納履 1987年(昭和62年86歳)半切たてに五字一行行書書き。潤筆の線の深さに渴筆の墨色の変化が筆路と呼吸を明らかにしていて快い。
35. 杜甫飲中八仙歌(四屏) 1988年(昭和63年87歳)の作。半切たて三行で四幅、四幅目は二行で最後の行は落款や小さい字で「右飲中八仙歌 黙語子微醉信筆 時戊辰小春や」とあり、奇石も少し酔って書いたが信筆と書しているところ興味深い。奇石は晩年腰痛で長いたて書きの作品は大変だったが、米寿個展にむけて早くから準備していたと思われる。小春とあるから、心身ともに爽やかなときに書いたものだろう。加工紙に書いたもので潤筆から渴筆への変化が見事である。運腕も70歳代に比して小さく、その反面線質に奇石の心情が凝縮している。繁から簡へ天真から平淡へ。自然で超俗脱塵の心境がこの詩を通して表現されている。(写真22)
36. 笑而不謔(答) 1988年(昭和63年87歳)の作。半切横一行四字書き。行・草で静かな韻のある作。
37. 蘇東坡廬山三偈之一 1988年87歳の作。全紙横に七言絶句28字を五行の行草体。運腕や、小さく文字に丸味と枯淡さを覚える。70歳代の潤達奔放な筆致は87歳では見られない。
38. 蜂房不容鵠卵 1988年87歳の作。全紙 $\frac{1}{2}$ の正方形に六文字を二行、行書体で潤筆で書いたものの。
39. 鹿鳴 1988年87歳の作。29×62cm半切 $\frac{1}{2}$ よりやや小さいが筆力があり、「鳴」字の鳥の第一画の強調が印象的、落款印のみ。(写真23)
40. 鈍鳥栖蘆 1988年87歳の作。動きや、小さいが、半切横に四文字の行書作品。落款に昭和戊辰夏五月を一行に小さく、その左下に奇石光更にその左横に時八十有七と印がユニークな表現。
41. 読書得趣是神仙 1988年87歳の作。全紙 $\frac{1}{2}$ の正方形に七文字を行書で表現。剛毫筆で筆圧を加味し、力強さと広がりを感じる。
42. 書魂 1988年(昭和63年87歳)12月の作。米寿個展の案内状にもなったもので、奇石書業の心意気が集約された作品。古紙と墨色の変化の妙味が洩い線質から伝わってくる。「書」の字のたて長で横画をつめた表現と「魂」字の横への広がりがうまく調和している。(写真24)
43. 南山寿 1989年(昭和64年88歳)の作。100×41 cmたて行草書三字。米寿奇石光の落款がある。筆が細く線に余裕がないが、88歳の作品では小規模ながら、動きの中に小宇宙を覚える。潤と渴の変化の妙が印象的。(写真25)
44. 鑑澄潭 1989年88歳の作。半切に横三文字。意味内容もあるが、白い部分多い作。正に枯淡平生の作。気力精魂や、おとろえた感あり。

45. 山部赤人の歌 1989年（平成元年88歳）の作。52×32 cm万葉仮名作品。奇石書芸の虚心平淡への移行を感じさせる。単体で余りくずさず平生心で書かれた。柔らかさと筆致の妙が鑑る者に静かな韻を覚えさせる。（写真26）
46. 自作早春 3の項で紹介済み。（写真3）
47. 山鳥啼野花笑 1989年（平成元年88歳）の作。半切一行、七字を草書で一気呵成書き上げた作。腰痛で腰が曲がり、一息で下に向う運筆は不可能だが、一筆で一字を書き上げる筆致は従来と変わらない。
48. 飯田蛇笏の句 1989年（平成元年88歳）の作。52×32 cmの紙に飾りや余分なものをすべて取り除いた簡素化の美がある。墨つけから墨継ぎまでの墨色の変化が見事である。温かい線質の調和体作品。（写真27）
49. 七言二句 1989年（平成元年88歳）の作。69×72 cm筆圧のきいた線温かさがあり黒と力強さを感じる。三行行草体で中央に集まり、最後に黙語子光を三行の下に接するよう落款。
50. 五言二句 1989年（平成元年88歳）の作。84 cm×28 cm紙に草書で二行書き。すべての余分なものを取り除いた明るく平淡な感じがする。奇石蒙筆と落款している。（写真28）

80歳代の奇石の書は、85歳頃まで70歳代の特徴の三つのうち圧度のきいた太い線質で大胆な筆の作はやゝ衰えながらもまだ見られるが、さすがに86、87、88歳になる身の自由がきかず作品も半切か全紙 $\frac{1}{2}$ ぐらいがやっとである。晩年の傑作は、87歳の（写真22）の杜甫の飲中八仙歌の多字数の四屏である。87歳まで書業を積み重ねたそのまとめとしての作のように思われる。書法を窮わめ求め終生線に生命を懸けてやまなかった奇石だが、88歳の米寿個展に見せたように、技法を超越した奇石の裸の姿が作品の上に表現された。気品と格調それは余分なものをすべて捨て去った虚心坦懐から生まれた作品ばかりである。また（写真26）に見られるような単体で小品の中に楷書に近い行書作品でありながら、その造形の面白さと空間の処理等、天真平淡で脱俗無塵の高い韻が鑑る者に伝ってくる。

6. 驥山館収蔵作品の奇石書芸

①. 書体及び形式等の種別

- a. 六朝風の楷書作品 1点 b. 行草体による多字数たて形式の作品 13点
- c. 少字数たて形式作品 9点 d. 少字数横及び正方形形式の作品 9点
- e. 調和体と仮名調の作品 3点

②. 仕上げ体裁

- a. 額 28点 b. 軸 16点、屏風及び卷子 6点

③. 書風による流れ

- a. 王羲之風の韻を大切にした作品

黒木拝石の師事し、臨書等の学習に励んでいた時で、王羲之を基礎に伝統派の書風で作品を発表していた。20歳の（写真4）や40歳の（写真5）等がこれに当たるが、いずれも静かで単体の行書体が中心の作で、奇石は「奇」にせず「奇」で書いている。

b. 六朝北魏風の楷書を奇石風の作品に仕上げた作品

驥山館で唯一の楷書作品（写真9）

c. 自由奔放に行間を余り意識しない作品

40歳代（写真6）や50歳代（写真7、8、9）、60歳代の（写真11）や16の寒山詩にその顕著なところが印象的に出ている。

d. 調和体や仮名調の作品

余り力味なく、天真爛漫な筆致で軽快で明るく、超俗無塵な作。70歳代の15の如き（写真13）（写真26、27）等に見られる。

e. 気迫、筆力、迫力があり生命感溢れる作。

特に65歳以降（写真12）、更に70歳代に最高に達する。（写真14、17、19）等がその代表的なものである。更に19の75歳の四曲屏風も見逃せない。そして80歳中頃までこの傾向は続いた。（写真21—33の面壁まで）

f. 筆を変幻自在に駆使し、しかも大小の文字の変化と行間のほどよいねり、墨色の妙味、潤渇の妙を尽した作品。（写真15、16、18）等奇石書芸作品制作上その技法表現において、心身ともに最高の時期にあった。心情の発露が筆管を通して遺憾なく発揮した。

g. 天真平淡の境地

奇石書芸最終着は、身も衰え動きも小さく、それでいて線質に温かさと深さがある。しかも墨色も65歳頃から79歳頃の墨痕鮮やかな迫力、気迫の横溢したものとは異なって、滋味で平淡そのもので、柔らかさを感じる作品へと進み鑑賞者を魅了した。（写真22、24、25、28）等に特に超俗無塵の境地が顕著に出ているように思われる。

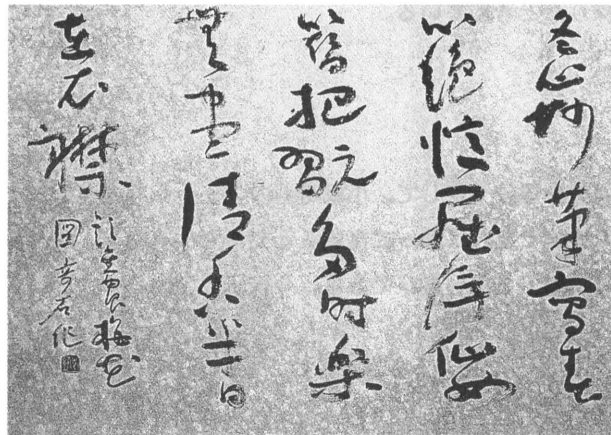
7. まとめ

今度長野県篠ノ井市の驥山館収蔵の小坂奇石作品50点について、年代順に分析を試みてきたが、まだまだ不十分かと思われる。奇石は書家でありながら漢詩もできる数少ない人物である。今回も50点中3点を自作の詩を書いて「詩書一如」を表現している。奇石書芸の流れは、王羲之を基礎に顔真卿や正統派の書道を学び、楷書では六朝北魏をベースに力強い重厚で厳しい書風であったことが「書典」・「書源」の月刊誌の手本からも推察できる。今回1点しかないが、その風が感じられる。奇石は強靱な精神の持ち主で、少青年時代は勉強のしすぎか、病気がちだったが、在阪以降結婚後健康に留意しながら、心身ともに鍛える不屈身を一生かけて、作り上げ、併せて禅僧の精神を学び、高雅で無塵超俗の格調高い書作品を作り上げていった。今回の50点の作品を通して奇石書芸の書法上の筆力、迫力、気力は勿論、正統派の書道の中道を歩み、気品の高い、高雅な書作品を次々に発表し、日本国内だけでなく、中国内でも高い評価を受けており、書道史の昭和時代に燦然と輝やく書家であると確

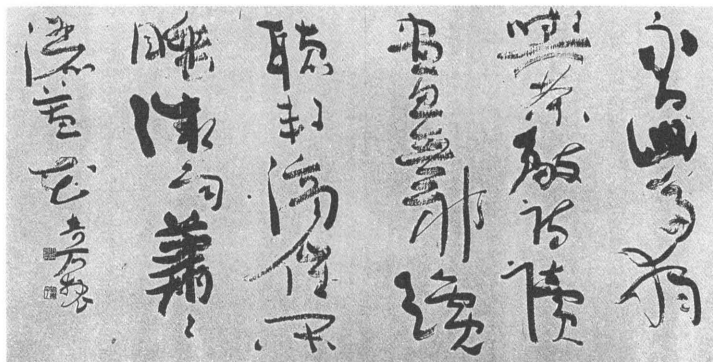
信する。今後は、徳島・長野・大阪の小坂奇石の作品を比較研究しながらもう少し総合的に分析して更に奇石書芸の本髄を探りたと考えている。

おわりに

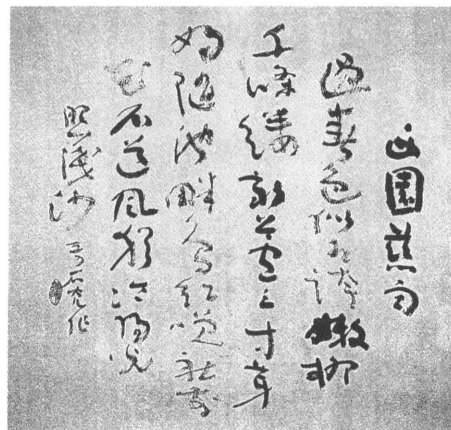
徳島県では、書道美術館を建設予定して、小坂奇石のコーナーもできるので、更に今好事家の所蔵している奇石の作品をも集約できれば願ってないことであり、その上、より多くの作品を直かに鑑賞して比較研究ができたならこの上もない喜びである。今後研究のための一助になれば幸いである。



(写真1)



(写真2)



(写真3)

晉太元中武陵人捕魚為業緣溪行忘路之遠忽逢桃花林夾岸數百步中無雜樹芳艸鮮美落英繽紛漁人甚異之復前行欲窮其林盡水源便得一山有山彷彿若有光便捨船從口入初極狹纔通人復行數十步豁然開朗土地平曠屋舍幽雅有良田美池桑竹之屬阡陌交通雞犬相聞其中往來種作男女衣着悉如外人黃髮垂髫並怡然自樂見漁人乃大驚而所從來具言之便要還家俱饌殺雞作食村中聞有此人咸來問訊自云先世避秦時亂率妻子邑人此絕境不復出焉遂與外人隔閡今何世乃不知有漢無論魏晉此中人久已忘世問其能與之及郡後延至其家皆出酒食停數日辭去此中人語不之為外人道也既出得其船便扶向路處處之及郡下詣太守說如此太守即遣人隨其往向所往遂迷不復得路南陽劉子驥高尚士也聞之欣然親往未果尋病終後遂無問津者

辛巳仲夏月錄陶明桃花源記并序

（写真5）

洋々平津乃漱乃濯逸々遊
景載欣我曠人亦有之辨心易
足揮一簣一觴均然自樂

辛巳仲夏月

（写真4）

然香看書人事都盡隔簾花落松梢月
上鐘聲忽度推窗仰視河漢流雲大勝

（写真9）

畫時非有洗心滌慮得意又象之表者
不可厭拜此語

陸湘雲詩 奇石錄

（写真6）

錦衣玉帶雪中飛
上天下地萬物中
前軍子青蓮

奇石錄

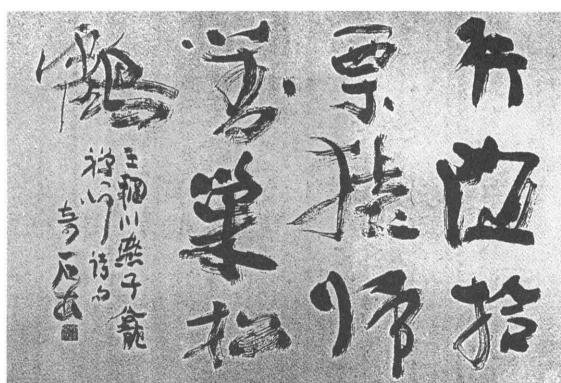
耳根得已琴瑟和
海峽清風吹竹簫
應門四果石之三

辛巳仲夏月

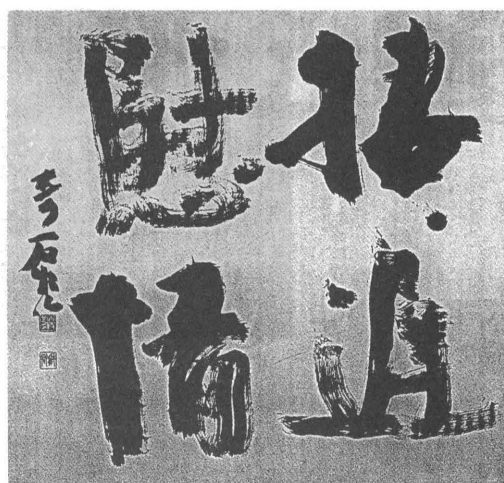
（写真11）



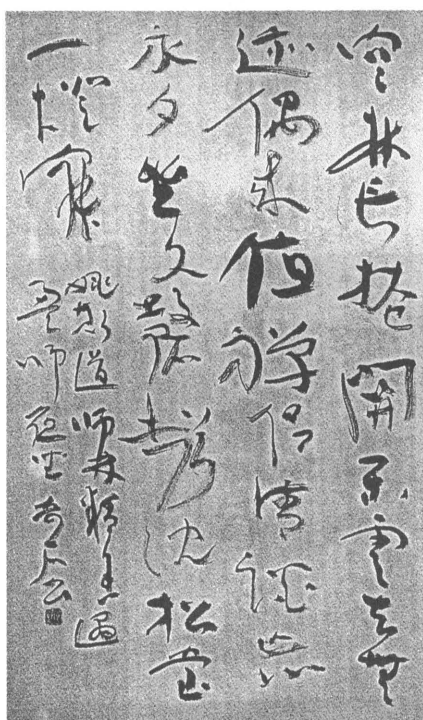
（写真12）



（写真14）



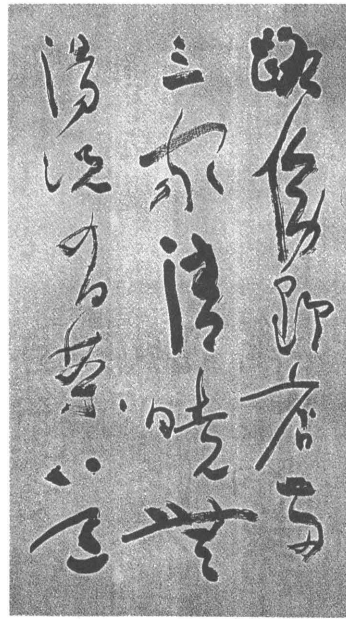
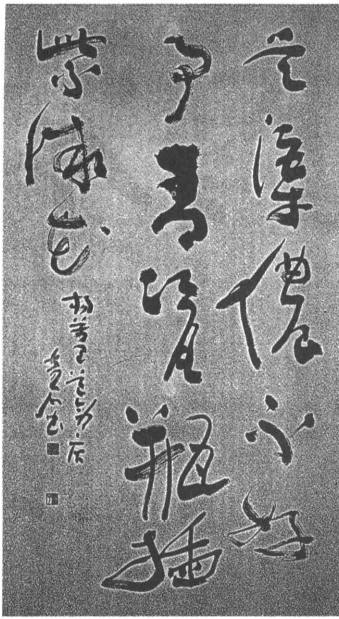
（写真17）



（写真16）



（写真23）



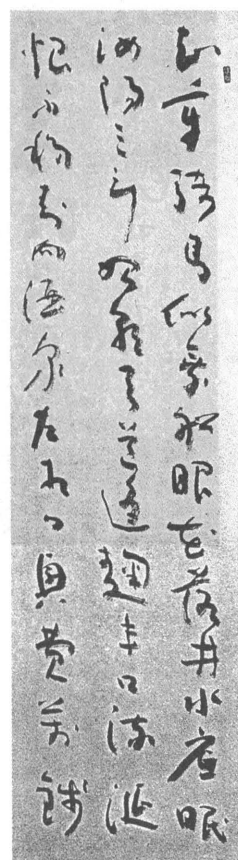
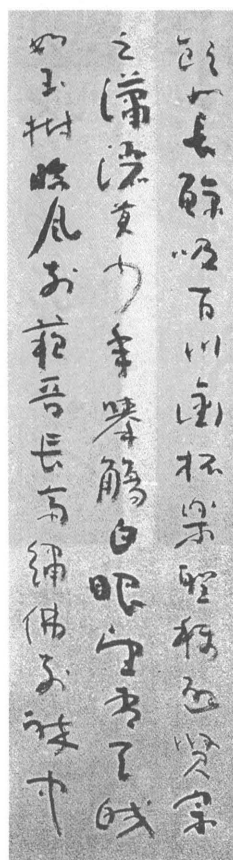
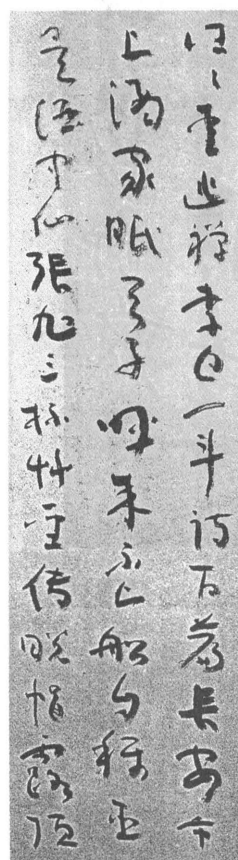
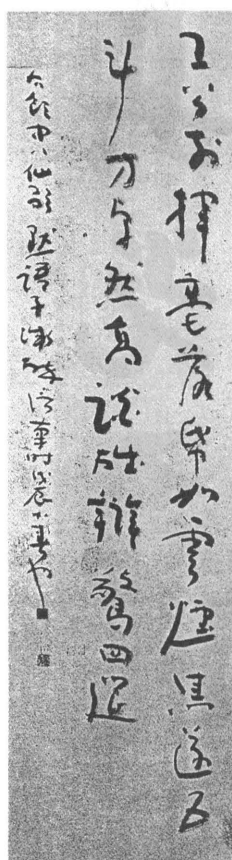
（写真18）



（写真19）



（写真20）



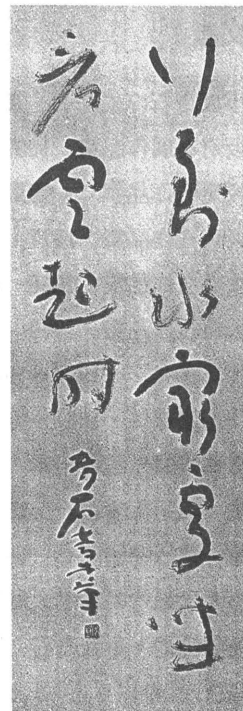
(写真22)



(写真24)



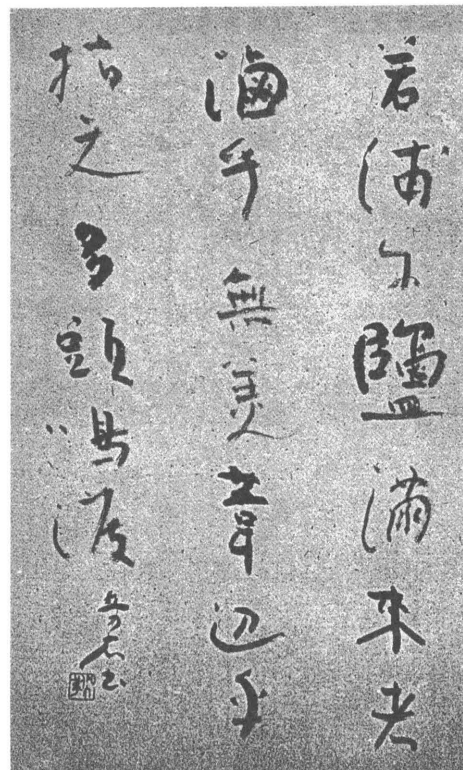
(写真21)



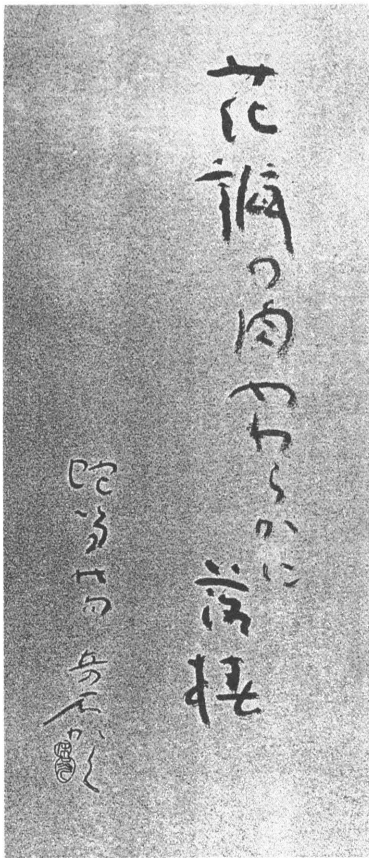
（写真28）



（写真25）



（写真26）



（写真27）

参考文献

- 一 小坂奇石の生涯 — 書道研究 璞社 1993
- 小坂奇石展作品集 1999 財団法人驥山館
- 小坂奇石作品集 一 徳島県収蔵作品 — 1997
- 小坂奇石作品集 1977
- 小坂奇石作品集 1989 璞社
- 小坂奇石作品集 1980 講談社
- 月刊誌書典 1954～1966 璞社
- 月刊誌書源 1967～現在 璞社
- 性霊集語録 書の手本 一 乾・坤 書芸界 1987
- 文集「黙語室雑記」 1978 璞社
- 文集「黙語室雑記」 1989 璞社
- 徳島大学総合科学部人間社会文化研究第4巻 1997 141～168頁
- 和雅の境地 小坂奇石 同朋舎出版
- 「鑑賞作品の作り方」 1959 若草書房
- 書道基礎講座 二玄社 1955 一 作品の作り方・名品解説を執筆
- 璞社書展作品集 第1回～38回展
- 「画禅室随筆講義」 同朋舎出版